

STYLING

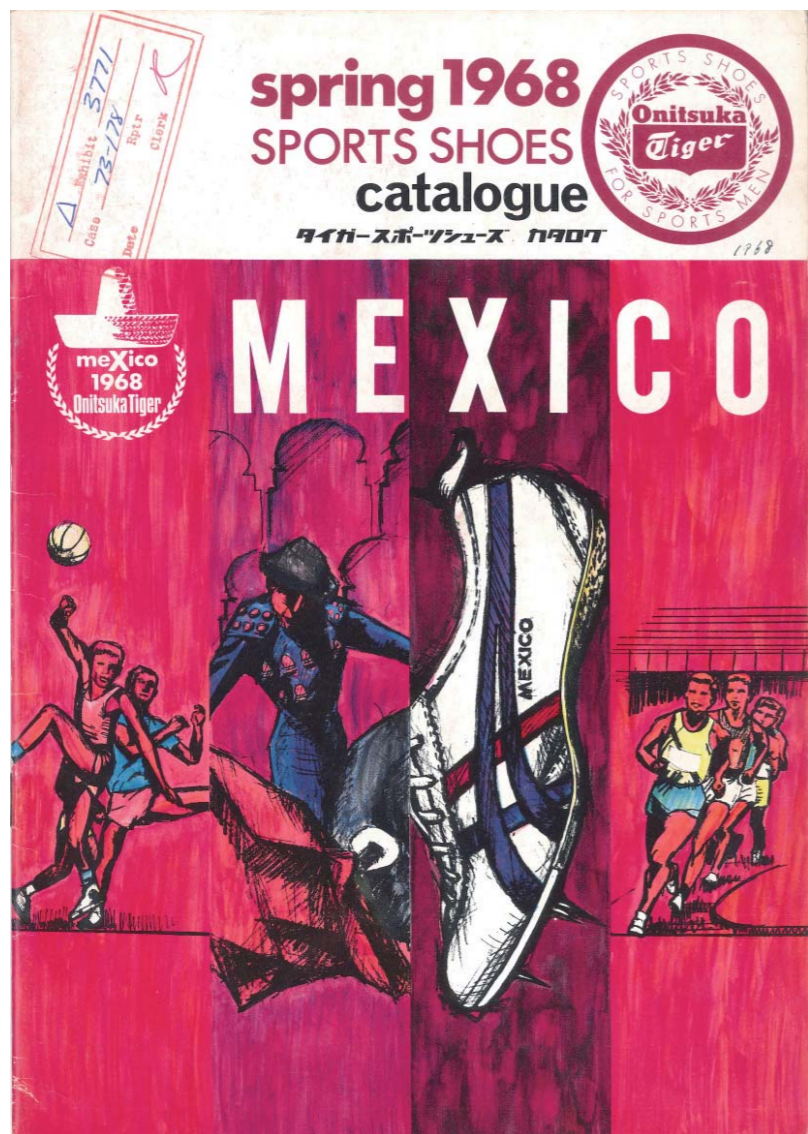
MONO

オニツカタイガーのスタートは、バスケットボールシューズの製造販売から。当時日本には多くのシューズブランドが存在していたが、同社は創業時はスポーツシューズ専用メーカーとして、さまざまなアイデアと技術を生み出した。



VOL.34 Onitsuka Tiger SINCE 1949~

●【オニツカタイガー】
Photo / Tomoaki Tsuruda(WPP)
Onitsuka Tiger
Text / Teruhiko Doi(WPP)



戦後日本の復興を全世界に知らしめたオリンピック東京大会から4年後の1968年、メキシコシティにおいて第19回目のオリンピックが開催された。走高跳の金メダリストになったアメリカの選手が見せた背面跳びが、スポーツ史に残る出来事として記憶されるが、日本国内ではいまでも語り草になる男子サッカー銅メダルや、マラソン君原健二の銀メダルなど、そこそこの盛り上がりは見せたが、東京オリンピックほどの強烈なドラマは起きなかった大会だった。しかし、競技とは別のシーンで密かにその歴史を刻み始めたモノがあった。オニツカタイガーが'68年のオリンピックに向けて'66年に開発したオニツカタイガーストライブである。

『MEXICO 66 DELUXE』
 定番の「MEXICO 66」をベースに
 作られた。足当たりのいい、
 柔らかなゴートレザーを使用し、
 さらに職人の手仕事による加工で
 細部までこだわりを溢れた
 仕上がりになっている。



STYLING

MONO

『NIPPON MADE』シリーズの
 インナーソールに印刷されている
 同社ロゴマークの下には、
 堂々と「日本製」の文字が。
 高度経済成長期に誕生し、世界を
 席巻したジャパン・クオリティを
 彷彿とさせるデザインである。



製品染めで着色されているソールには
 オニツカタイガーの刻印。「タイガー」の名は
 アジアで一番強い動物であることに由来。



シューズのスタイルを判断するのに
 大切なポイントは踵からのディテール。
 クロスで補強されている。



スエードを使用して丹念に
 縫いつけられたオニツカタイガーストライプ。
 ミシン目の細かさがクオリティの高さを表す。

〆本物の日本〆をテーマに2008年から
 スタートしたオニツカタイガーの
 『NIPPON MADE』シリーズ。
 今年のモデルも日本の職人の手により
 高い技術と感性で生産されている。
 『MEXICO 66 DELUXE』は
 一足ごと職人の手による加工が施され
 機械生産では表現しにくい
 風合いを実現した。
 写真のモデル(Dyed type)は
 マスタード×マスタードのカラーで、
 「製品染め」と「オイル加工」が施され、
 独特のヴィンテージ感、
 クラフト感を演出している魅力的な一足。
 『NIPPON MADE』シリーズでは
 デザイン×クオリティを
 高い次元で融合し、
 スタイリッシュな完成度を実現。
 日本人がオニツカタイガーを履くことの
 意味を、改めて教えてくれる存在である。
 現代の日本が忘れかけている。矜持が
 そのシューズ作りを通して
 伝わってくる。



アッパーに採用されている素材は
 ゴートレザー。スムースレザーとスエードの
 コンビが、センス良くまとめられている。



成型後の後染めであるため
 ソールの色も着色されている。
 見えない部分の個性というのがいい。

STYLING

MONO

オニツカタイガーといえば、クエンティン・タランティノーの映画「キルビル」を思い出す人も多いはず。映画の中でユマ・サーマンが戦いのシーンで履いていたのは、同社の「TAI-CHI」だが、普段履きのシーンは「MEXICO 66」を履いていたようだ。



オニツカタイガーの歴史は1949年に神戸で創業した鬼塚株式会社からスタートした。創業者は鬼塚喜八郎。バスケットボールシューズの製造販売を皮切りに、品質のいいシューズを製作。現場の声を製品改良に反映させ、質のいいスポーツシューズとして人気となっていった。同社が初めて作ったバスケットボールシューズは、ソールの土踏まずの部分にトラの顔がデザインされていたが、これが後の「オニツカタイガー」のトレードマークになっていく。

創業理念は「スポーツを通じて青少年の健全な育成を」。敗戦から立ち直りつつあった当時の日本は、1950年代後半から60年代にかけて高度経済成長期に入る。敗戦の痛手を癒すように日本国民はスポーツの楽しみを実感し始めていた。運動用のシューズは特殊なスバイクなどを除いて、多くのものが日常で履けるような作りであったため、学校での部活動以外に、登下校時に運動用シューズを履くことが流行する。中でも団塊の世代の子供たちにとって、オニツカタイガーは洒落者のアイテムだったのである。特に東京オリンピック以降、スポーツが社会の中で市民権を得る存在になったことも見逃せない事実である。

ちなみに、1956年のメルボルン・オリンピック日本選手団用のデレグレーションシューズとしてオニツカタイガーのシューズが初めて正式採用された。製品を通してのオ

このレトロなデザインが時代を超えた名品の証

リンピック参加で同社の知名度は飛躍的に高まり、8年後の東京オリンピックではオニツカタイガーのシューズを履いた選手が大活躍。マラソンなど、国内外を合わせて47個のメダル（金メダル21、銀メダル16、銅メダル10）を、オニツカタイガーを履いた選手が獲得した。



メキシコ・オリンピックの2年前に発表されたカタログ。この年、初めてオニツカタイガー ストライプ(当時はメキシコライン)が生まれた。



「MEXICO 66」のインナーソールにはブランドのロゴマーク。



踵を補強するためにデザインされたMEXICO 66のアイコンともいえるクロス補強。



薄底・細身に代表されるオニツカタイガーのスタンダードなシルエットである。



「NIPPON MADE」であることは妥協しない職人の感性がそこに織り込まれているということ。

90年代になると、スポーツシューズのストリート進出は珍しいものではなくなってきたが、ハイテクシューズ大ブームの一方で、レトロなシューズへの注目度が高まっていた。オニツカタイガーが2002年に復活し、現在も同社の定番商品である「メキシコ66」のレトロなデザインが、ストリート・キッズたちの目に留まったのはある意味、必然だったのかもしれない。60年代当時のハイテクが時を経てレトロフューチャーな価値観

を生み出し、オリンピックという日本人が大好きなスポーツイベントにそのルーツを持ち、いくつかのモデルチェンジで過去のアイテムに新たな価値が生まれたことなどがその理由。現在「メキシコ66」は定番モデルとして安定した人気を誇っているが、デザインだけでは語れない、履き心地のよさも人気の秘密だ。オニツカタイガーは1977年に「アシックス」に社名変更した同社の、愛すべきブランドラインである。

オリジナルスポーツファッションブランドとしてのポジション

オニツカタイガーのブランドポジションはシューズブランドではない。総合的なスポーツファッションブランドとして、シューズ以外のアイテムにも「おっ」と思わせるモノが多い。同社のキーワードにもなっている「レトロ」な雰囲気やウエアにも反映されており、ヴィンテージ系のウエアとの相性がいい。シューズとアウターに1アイテムという組み合わせが新しい。



機能素材のウエアだが、全体的なデザインはレトロなお洒落なウインドブレイクジャケット。価格1万2600円



右はMEXICO 66
左はMEXICO 66 DELUXE



STYLING

MONO

オニツカタイガー製品に関する
お問い合わせは
@アシックスお客様相談室
TEL 0120-068-806
<http://www.onitsukatiger.com>



1949年に「鬼塚株式会社」として創業。優秀なシューズを作るために、早くから画期的な最新技術を積極的に導入していた。創業当時から科学的なテクノロジーでスポーツを考えていたブランドである。右の写真は創業者の鬼塚喜八郎。



MEXICO 66 DELUXE (TH9J4L)

ワイン×ワイン
価格 2万3100円



MEXICO 66 DELUXE (TH9J4L)

マスタード×マスタード
価格 2万3100円



MEXICO 66 DELUXE (TH938L)

ブラック×ブラック
価格 2万2050円



MEXICO 66 DELUXE (TH9J4L)

ブラック×ディープブラック
価格 2万3100円



MEXICO 66 DELUXE (TH938L)

ホワイト×ブルー
価格 2万2050円



MEXICO 66 DELUXE (TH938L)

パーチ×インディアンインク
価格 2万2050円



MEXICO 66 (THL202)

ホワイト×ブルー
価格 1万2600円



MEXICO 66 (THL202)

ベージュ×グラスグリーン
価格 1万2600円